

研修報告

＜大学コンソーシアム京都 第1回高等教育政策研究セミナー＞

都市教養学部 経営学系・教授
日高 千景

「授業評価と大学改革」

日時：2006年5月13日（土）13：30～16：00

会場：大谷大学 1号館 1113号

報告1：川口昭彦氏

（大学評価・学位授与機構理事）

報告2：奥川義尚（京都外国語大学教授）

質疑応答

＜報告概要＞

報告1は「授業評価と大学改革—機関別認証評価との関連—」と題する報告で、報告者の川口氏は、長年大学で研究教育に携わられた後、大学評価機関の発展に尽くされている方である。同報告は、①評価文化を基盤とした大学の発展、②大学評価の歴史、③機関別認証評価の内容、④学生による授業評価と教員相互の授業評価、⑤何のための評価か？という5つのテーマから構成されたものである。

同報告では、「評価文化を基礎として、社会に開かれた大学」という21世紀の大学像が提示され、その基礎をなす評価文化、すなわち、「評価情報を自ら価値付け、次の行動を選択していくこと」の重要性が第一に強調された。そして「大学評価」の内容として重視すべきは、単純な数値化には馴染まない「質の保証」、すなわち、

学生が在学中に得られる付加価値は何か、および、どのような内容の研究が行なわれ、その成果はどうであるかということが説かれた。したがって、大学組織を構成する者は、この「質の保証」に含まれる広範な意味を認識した上で、その改善に資するような評価のあり方やその内容に関する説明責任をいかに果たすかを模索していかなければならない。「評価」という言葉のもつ意味について、深い理解が必要であるとの再認識を促す貴重な報告であった。

報告2は「日本における大学改革の一環としての授業評価とアメリカにおける大学評価と大学改革」と題する報告で、報告者の奥川氏は、特にアメリカの大学院教育とその評価に関する専門知識の深い方である。同報告では、とりわけ、アメリカの大学が世界の学術研究の中心として突出した地位を占めているのは、大学評価に関する取り組みの歴史が長いことと深い関わりがあることが強調された。大学評価史の詳細な解説をともなった報告ゆえに、その主張には説得力があった。

報告後の活発な質疑応答も含め、FD活動をわれわれがどのように位置づけてどのように取り組んでいくべきかについて、広い視野から考察する機会となる充実したセミナーであった。